人生もギャンブル？

「麻薬にはまってしまって抜けられない家族がいる」という話しはめったに聞かないが、
「賭け事にはまった人がいる」という話は耳にすることがある。周りが気づいた時には、驚くような借金を抱えている。
それなのに、「収益を増やすために、カジノを作ろう」などという案を出す地方自治体もある。
アメリカでは、ギャンブルが離婚や破産や自殺を増やしているという報告がある。カジノで知られるラスベガスのあるネバダ州は、全米一の自殺率だ(*1)。カジノが建つと、半径80キロ以内のギャンブル依存症者が2倍になるという報告もある(*2)。
人は、なぜギャンブルにはまるのか?どうしたら抜けられるのか?聖書は、ギャンブルについて、何か言っているのだろうか?今回は、ギャンブルについての書籍を二冊紹介しつつ、こうした問題を考えたい。

「ギャンブルは、社会のガン」

競馬、競輪、競艇、宝くじは、日本では合法的ギャンブルである。ネット賭博さえある。娯楽の一部として健全につきあうと考える人もいるが、ギャンブル中毒者の家族にとっては、お金を無限に吸い取るブラックホールのようだ。この種の相談が、私どもFFJの事務所に来たこともある。

ことに、パチンコは法律上はギャンブルではなく風俗業だが、三十兆円の規模を誇る。日本の国家予算が八十兆円だから、その巨大さが分かる。他のギャンブルと比べても飛び抜けて大きく、女性客も多い。国民一人当たり毎年なんと約三十万円もパチンコに使っている計算になるそうだ。「ちょっとだけ」と、車に幼児を寝かせたままパチンコに興じているうちに、子どもが熱中症で亡くなるという悲劇が最近は目立つ。夢中になり前後の見境いをなくすからだ。

日本では認知されていないが、「ギャンブル依存症」は、一九九二年に精神疾患として国際的に認められた。「ギャンブル依存とたかう」の著者、医師でもある帚木蓬生（ははきぎほうせい）氏は、日本のギャンブル依存症患者を二百万人とみる。アメリカでは、四百五十万人と推定される(*3)。

一九九七九九年に米連邦政府ギャンブル問題諮問委員を務めたドブソン博士は、「ギャンブルは、家族のきずなを破壊する社会のガンであり、ウィルスのように広がりつつある」と警告している。

帚木氏によれば、ギャンブルの歴史は古く、古代ローマのネロ皇帝もサイコロゲームに熱中していた。日本でも紀元七世紀に持統天皇が「賭博双六の禁止」を発令したと、日本書紀にあるそうだ。

文学者では、ロシアのドストエフスキーが病的賭博者だったことが知られている。同氏には、そのものずばり「賭博者」という小説もある。

渋谷昌三著「ギャンブルの魔力 なぜはまるのか、どうつきあえばいいか」は、ギャンブルについてQ&A方式で手短かに教えてくれる。自分の「ギャンブル度」を計るクイズもある。質問と答えのサンプルをいくつか見てみよう。

「なぜやめられなくなるのか」

Q「なぜ、負ければ負けるほどギャンブルをやめられなくなるのか」

A「人は、つねに報酬が得られるときよりも、報酬があったりなかったりするときのほうが熱中しやすい」

確かに、百%当たるくじには、スリルも何もない。「ときどき当たって報酬が得られる」からこそ、人ははまってしまう。これを「部分強化」と呼ぶ。

Q「なぜ、ギャンブルで勝ったお金は身につかないのか」

A「人は、日ごろの金銭感覚以上の大金を前にすると、心理的インフレをおこし、お金をお金と感じなくなる」

アメリカで行われた実験では、小学校の一クラスの子どもに、一ドル硬貨の大きさを見ないで書かせると、裕福な子ほど本物の硬貨より小さく書き、貧しい家庭の子は大きく書くと言う。その子の金銭感覚が、絵に現れるのだ。

「自分の金銭感覚は、はたして正常だろうか？」と考えさせられる。聖書は、お金を愛すること、お金に頼ることの危険を語っている。ともすれば「お金がすべて」という感覚に陥りやすいのが現実だ。お金には、本当に大切なものを見えなくさせる魔力がある。

「金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通しました」（テモテ第一6章10節）

Q「なぜ、ギャンブル依存症からなかなか抜けられないのか」

A「ギャンブルのかげに隠された欲求不満を解消しないかぎり、ギャンブルはやめにくい」

例えば、ある主婦に家庭生活に対する不満がたまっていて、それを吐き出す場所や解決の方法が見つからない場合、代償行為としてのパチンコにはまることがある。夫が、もっと家庭生活に関心を払うことがなければ、妻の中毒行為は止まらないだろう。

人間には「あまのじゃくの心理」というのがあって、「やめろ」と言われると、かえってしたくなり、「やりたい放題やりなさい」と許可されると、「やめてもいいかな」と思うものだと言う。「説得のブーメラン効果」と呼ぶ。だから家族としては、「絶対にやめろ」と脅すばかりが能ではない。本音を吐ける関係を作ることが大事だ。はじめからギャンブルをしていることを周囲に話す人は、深みにはまりにくい。

「人生もギャンブル！」って本当？

「ギャンブルの魔力」は、その危険を説くだけではなく、「人生にも、ギャンブル的な要素はある。ギャンブルに向けるエネルギーを仕事と人生に向ければ、健全な方向に持って行ける」と主張する。たとえば、こんな箇所がある。

Q「なぜ、やりてのビジネスマンにギャンブル好きが多いのか」

A「潜在的エネルギーの高い人ほど、仕事でも遊びでも成功を求めて熱中しやすい」

ある人が、根っからのギャンブル好きで、若い編集者だった頃、麻雀や競馬、競輪と遊びまくった。しかし、自分で出版社をやりだしてから、そちらのほうがとてつもないギャンブルで、他のギャンブルはやる気がなくなったという。生来もっていた活力が仕事に生かされたのだろう。

「人生にも賭けの要素がある」と言われると、なるほどとうなずいてしまうが、どういう意味かは考えておく価値がありそうだ。

キリストのたとえ話でも、一タラントを死蔵していたしもべは、主人から叱られ、五タラントを十タラントに増やした商売上手なしもべは、「よくやった。良い忠実なしもべだ」とほめられ、ほうびを受けた。（マタイ25章20・21節）ただし、これはギャンブルではなく、まじめな商売だ。それに、お金を増やすことそのものをほめているのではない。「天の御国」のたとえであり、人それぞれに与えられた賜物を増やし生かす大切さを言っている。

「商売をして、もうけよう」という露骨なもくろみに対しては、人間の計画よりも神の主権に従うことを勧め、高ぶりの危険に注意するよう促す（ヤコブ4章13節）。自分の預貯金残高を気にするより、キリストがくださる永遠の命の価値を知り（マタイ16章26節）、この世的には損をしてでも天に宝を積むこと（同6章20節）を、神は励ます。

聖書に、「くじを引く」という表現は何度か出て来る（ヨシュア14章2節、箴言16章33節、マルコ15章24節、使徒1章26節）が、それも「土地の配分や人選の時に、主のみこころを求める」のが目的で、お金儲けのギャンブルそのものはない。

確かに「賭け事をしてはならない」という戒めはない。しかし、聖書が警告している「貪欲」をかきたてるのが、ギャンブルだ。それは、家庭生活の大切さや勤勉に努力することの尊さを忘れさせる。

「むさぼりを殺してしまいなさい」（コロサイ3章5節）

「衣食があれば、それで満足すべきです」（テモテ第一6章8節）

「神にも仕え、また富にも仕えるということはできません」（マタイ6章24節）

ギャンブルでも人生でも、リスクを恐れていては、何も始まらない。しかし、ギャンブルの一つの魅力が、勝敗がすぐに出ることで

(*1) 米フォーカス・オン・ザ・ファミリー制作　VHS「ギャンブル」＜英語版のみ＞
(*2) 合法的ギャンブルに反対する全米協議会（www.ncalg.org/Gambilng%20Inside%20Story.htm）
(*3) VHS「ギャンブル」